

2015 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一 次の記事を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

近代社会、もつと限定すれば西欧近代社会の最大の発明品のひとつは科学技術だと思ふ。科学と技術ではない。客観的法則として表される科学理論の生産実践への意識的適用としての技術である。それを発明したがゆえに、西欧近代に生まれた文化が、現代では世界を席巻するに至っている。実際、今日では科学技術は個人の日常生活から国家間の国際政治にいたるまで、巨大な力を有している。

現代の科学技術の「隆盛」は通常は一七世紀科学革命と言われる西ヨーロッパの文化的変動に始まる。それ以前までのヨーロッパでは、哲学、神学、文学のすべての世界で、技術は自然に及ばないと考えられていた。一二世紀に西欧は古代ギリシャの学芸を見いだしたが、はやくにアリストテレス哲学に開眼したシャルトル学派の一員コンシュのギヨームは「すべての技は、創造主の技か、自然の技か、自然を模倣する職人の技のいずれか」であり「創造主の作品が完全である」のにひきかえ「人間の作品は不完全である」と記している。同時代のサン・ヴィクトル修道院のフーゴーは「業には三種類あり、神の業、自然存在の業、自然存在を模倣する技術者の業がそれである」と語り、そのさい「技術」が作るものは「まがい」であり自然に劣る不完全なものとしている。中世文学の傑作、一三世紀中期の『薔薇物語』にも「技芸は自然の前にひざまずいて猿のように自然を真似る」が「けつしてへ自然」には到達できない」と記されている。

この状況が大きく変化したのがルネサンス期であった。ルネサンス期は、中世キリスト教社会では異端と見なされ日陰に追いやられていた魔術思想やヘルメス主義が公然と語られ始めたことで特徴づけられる。「人間は神的な生き物であつて……神々と呼ばれる者にこそ比べられるべきである」と書かれた「ヘルメス文書」に影響を受けたフィレンツェのプラトン・アカデミーの若き論客ピコ・デラ・ミランダは、一五世紀末に有名な「人間の尊厳について」を著し「人間は偉大なる奇跡であり」「人間は、望むものを持ち、欲するものになることが許される」と宣言している。ピコにとって人間は、宿命をカンジュする受動的な存在ではなく、自律的に決意し選択し主体的に世界に働きかける可能性を有する、神に許された存在であつた。

そしてルネサンス後期（一六世紀）の自然魔術は、それまでの妖術とは異なり、人間は、デーモン（悪魔）に頼ることなく、自然の法則に随順することによって秘められた自然の力を使役しようという可能性を公然と語り始めた。ピコは自然魔術を「自然哲学の絶対的完成」と規定している。実際それは、自然的事物はすべて靈魂を有するという物活論および世界は「反感」と「反感」のネットワークからなるという有機体的自然観にもとづくものではあれ、近代科学技術思想の先駆であった。そして自然魔術師や職人・技術者たちは、実験による試行錯誤を自然認識あるいは自然力の技術的使役のノウハウの開発にとつて有効な方法として提唱した。しかしそれでも彼らは、自然にたいする畏怖の念を中世から受けついでいた。

そしてこの時代に自然魔術師や技術者や職人は、自身が開発し蓄積してきた技術ノウハウをおりから出現した印刷出版によって公開していった。私が「一六世紀文化革命」と名づけた知の世界の地殻変動の過程である。

さらなる変化は、それまで手仕事を蔑み、論証技術に長け、もっぱら古代文献の釈義に明け暮れていたエリート知識人のうちに、職人や魔術師に担われてきた知のあり方の有用性を認めるものが出現したときに始まった。こうして文書⁽⁵⁾・論証優位の知から技術にも関心を寄せ経験をも重視する知へと視座がテンカイしてゆくに⁽⁶⁾応じて、一六世紀文化革命は一七世紀科学革命へと発展してゆく。あの観念的なデカルトでさえ、屈折光学の研究において「研究など一度もやったことのない職人の技巧に頼らねばならない」と記しているのである。それ以前のどの文明においても思弁的な論証知と技術的な経験知は存在していたが、それらはたがいにソエン⁽⁷⁾であった。この時代にひとりヨーロッパ文明だけがこの両者を結合させるのに成功したのであった。

自然認識における近代への転換を象徴しているのが、滑らかな斜面に沿って物体を滑らせ、水時計でその時間を測定することである。真空中での物体の落下距離は落下時間の二乗にしたがって増加するという法則を立証したガリレオの実験であった。しかし自然界には真空は存在しない。それゆえこの法則は当初「思考実験」として論証によって導かれたのであり、彼の実験は思弁と経験を結合するはじめての仮説検証型の実験であった。滑らかな斜面を用いることで落下時間を引き延ばして時間の測定を容易にし、かつ空気抵抗の影響を低減させることで自然界には存在しない真空中での落下という理想化状況に人為的に近づけてなされたその実験の目的は、それまでの魔術師による自然の模倣としての驚異の再現や技術者による闇雲な試行錯誤をつうじてのノ

ウハウの改良ではなく、時間と空間の關係としての定量的法則を確立することであつた。ガリレオは、人為的に構成された理想化状況で精密な観測を行うという職人的技芸と抽象的概念を操作するスコラの論証技術を結合させたのである。

このガリレオの實驗の意義を、カントは「理性は一定不変の法則にしたがう理性判断の諸原理を携えて先導し、自然を強要して自分の問いに答えさせねばならない」ということを自然科学者が知つたことに求めている。「それはもちろん自然から教えられるためであるが、しかしその場合に、理性は生徒の資格ではなくて本式(9)の裁判官の資格を帯びるのである」。ここには、人間が自然の上位に立つたという自覚が鮮明に窺うかがえる。そしてそれは「自然の秘密もまた、その道を進んでゆくときよりも、技術によつて苦しめられるとき、よりいっそうその正体を現す」と言つたフランシス・ベーコンから「私が元素の混合によつて生ずるといわれている諸物体そのものを試験し、それらを拷問にかけてその構成原質を白状させるために忍耐強く努力したとき」と語るロバート・ボイル、そして「自然は、より穏やかな挑発では明かすことのできないその秘められた部分を、巧みに繰られた火の暴力によつて自白する」というジョセフ・グランヴィルにいたるまでの一七世紀の論客に共通する、能動的な、というよりむしろ (10) 的な實驗思想に發展してゆく。

これとならんで、ケプラーやフックやニュートンによつて、かつては魔術的文脈で語られていた自然の力にたいする物理学的で数学的な把握——力概念の脱魔術化——が進められていった。

その延長線上に科学技術による自然の征服という思想が登場する。實際、「技術が自然と競争して勝利を得ることにすべてを賭ける」と語るベーコンによつて、自然研究の目的は「行動により自然を征服すること」にあつた。これは一六二〇年の『ノウム・オルガヌム』の一節であるが、そこには「技術と学問」は「自然にたいする支配権」を人間に与えるものと明記されている。機械論哲学の徒デカルトもまた、一六三七年の『方法序説』で、新科学のもたらす「実践的な哲学」によつて「私たちは自然の主人公で所有者のようになることができるでしょう」と語っている。

それと同時にベーコンは (11) 科学技術研究の近代的なあり方をはじめ提唱した。彼は實驗を語っているけれども、彼の構想した科学は、事物の本質を探り出すことを目的としたことにおいていまなおアリストテレス哲学にとらわれたものであつた。しか

し彼は、一方で理論的学知としては、アリストテレスたち古代の哲学者たちの理論が、⁽¹²⁾精緻ではあるものの現実の實踐には役立つと切り捨て、それにたいして、自然にたいする働きかけにとつて有効でかつ自然との交通の経験がフィードバックされることで次第に完成されてゆく理説を対置した。他方、技術にたいしては、それまでの職人や技術者による発明が理論的な指針にもとづかず、「偶然でふとしたはずみによるもの」であつたという目的意識や計画性の欠如を、その限界として指摘する。こうして彼は、近代科学技術研究のあり方として、選ばれた専門の研究者集団が国家の庇護のもとで先進的研究と技術革新を組織的かつ目的意識的に遂行すべきことを提唱し、晩年の『ニュー・アトランティス』において、その機関として「ソロモン学院」を描き出している。

このガリレオの実験思想、デカルトの機械論、ニュートンの力概念による機械論の拡張、そしてベーコンの自然支配の思想を背景に、近代の科学技術思想が形成されていった。自然と宇宙に見られるさまざまな力を探りだし、その法則を突き止め、それを自然の支配のために制御し使役するという目的において、近代の科学技術は自然魔術思想の継承である。しかし、近代科学は古代哲学における学の目的であつた「事物の本質の探究」を「現象の定量的法則の確立」に置き換えただけでなく、魔術における物活力論と有機体的世界像を要素還元主義にもとづく機械論的で数学的な世界像に置き換えることで、説明能力においてきわめて優れた自然理論を作り出した。そして同時に近代科学は、おのれの力を過信するとともに、⁽¹³⁾を忘れ去つていったのである。

(山本義隆『福島原発事故をめぐって』による)

注 ヘルメス主義……ヘレニズム期にまでさかのぼるとされ、ルネサンス期に盛んになつた神秘主義思想。 スコラ……中

世後期の神学思想で、極度に思弁的な議論を特徴とする。 機械論……あらゆる現象を機械的な運動に還元して説明し

よつとする立場。

〔問一〕 傍線(3)(5)(6)(7)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)(12)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(1)「席卷する」にもっとも意味の近い語を左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 揺るがす B 驚嘆させる C 制覇する D 変革する E 活性化する

〔問四〕 傍線(4)「近代科学技術思想の先駆」とあるが、筆者はどのような点が近代科学技術思想の先駆であったと考えているの

か。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 技術は自然が行っていることをなぞるものだと考えた点。
B 自分たちが古代以来の自然哲学を完成させたと考えた点。
C 自然のうちに見られる定量的な法則の解明を目標とした点。
D 人間には技術によって自然の制御が可能であると考えた点。
E 技術の有用性を確かめ向上させるために実験を繰り返した点。

〔問五〕 傍線(8)「この両者を結合させるのに成功したのであった」とあるが、どのようなことに成功したのか。その説明として

もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 一定不変の自然法則にしたがって論証することによって自然の本質を明らかにする仮説を形成し、その正しさを検証するために、人為的に作り出された理想化状態で実験を行うこと。
- B 自然の法則に随順することを通じて事物の本質を思弁的に明らかにし、その正しさを自然界には存在しない理想化状況に近い状況を技術によって作り出すことによって立証すること。
- C 論理的思考にもとづく思考実験によって、当該の自然現象を説明する理論を形成した上で、技術を駆使して理想化状態に近似的な状態を作り出すことによって、その正しさを確かめること。
- D もっぱら論理によって入り組んだ自然現象を思考において純化し理想化することで理論を作り出し、その正しさを実証するために、自然界ではあり得ない非現実的な状況を技術的に作り出すこと。
- E 新しい技術が可能にしたさまざまな実験から得られた経験知を積み重ねることによって仮説を形成し、その正しさを検証するために、古代より受け継がれてきた論証知を駆使して思考実験を行うこと。

〔問六〕 傍線(9)「本式の裁判官の資格を帯びる」とはどういう^{たと}喩えか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 裁判官が厳格に法律に照らして判断することで有罪無罪の判決を下せるように、理性は実験によって自然法則に照らして真理を明らかにできること。

B 裁判官が被告や証人に対して厳格的な確な尋問を行って答弁を引き出し合理的判断を下すことができるように、理性は的確な実験によって自然法則を明らかにできること。

C 裁判官が被疑者に対して精神的ないし身体的苦痛を与えることによって真実を告白させることができるように、理性は実験によって秘められた事物の本質を明らかにできること。

D 裁判官が先入観を一切排して被告や証人の証言内容に耳を傾けることによって真実を見抜けるように、理性は実験によって冷静に自然を観察することで自然法則を読み取れること。

E 裁判官があらかじめ犯人の目星を立てた上で、仮借ない尋問を行って自白を強要するように、理性はあらかじめ想定していた自然の本質に関する理論の正しさを実験によって示すことができること。

〔問七〕 空欄(10)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 攻撃 B 破壊 C 拷問 D 魔術 E 冒険

〔問八〕 ベーコンが提唱したとされる傍線(II)「科学技術研究の近代的なあり方」とはどのようなことか。次の文ア～オのうち、

それに合致しているものに対してはA、合致しないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 近代科学技術は、あるがままの自然を観察することによって自然法則を見出そうとしていること。

イ 近代科学技術は、技術を最大限活用して、人間が自然を支配しうる領域を拡大することを目指していること。

ウ 近代科学技術は、その発展のためには国家がバックアップして計画的な科学技術の開発を行う必要があること。

エ 近代科学技術は、自然にたいする有効な働きかけを行い、その結果を理論へと反映させることで発展すること。

オ 近代科学技術は、まず思弁的な論証によって自然法則を解明し、技術を駆使してそれを再現することで確認すること。

〔問九〕 空欄(19)に入れるのもっとも適当な十字以上十五字以内の語句を、本文中から探し出して答えなさい。(句読点、かつ

こも一字に数える)

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

式子内親王の代表作といえは、『百人一首』の、

百首歌の中に、忍恋を

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする(新古今集・恋一・一〇三四)

だといわれることが多い。たしかに名歌の誉れ高い歌である。ただ、恋の歌としては、少々常軌を逸したところがないではない。呼び掛け(初句)、仮定十命令(第二句)、仮定(第三句)、懸念(第五句)と、普通の叙述がほとんどない。上から下まですべての語に何らかの情意・情動がこめられている。初句・第二句と連続して句が切れて、おまけに、恋が露見してしまうくらいなら死んだ方がましだ、などと言うのだから、よほど差し迫った恋心である。おそらく、世人に知られたら破滅を覚悟するほかに相手でもあるのだろうか。ずいぶん悲劇的な状況だと読みうるけれども、こういう読解は、あくまで和歌を作品として独立して味わうことで生まれてくるものだ。和歌作品の中で、恋に苦しんでいると読み取られる人物を、「作品の中の作者」としておこう。物語や小説でいえば登場人物だし、あるいは「作中主体」という言葉の方がわかりやすければ、それでもかまわない。あくまで作品という舞台上に登場している人物のことである。

ここで確認しておきたいのは、「現実の作者」と「作品の中の作者」は、基本的に別々の存在であることである。この歌は、現実の恋愛の渦中で詠まれた歌ではない。『新古今集』の詞書によれば、「百首歌」という、一人で百首まとめて歌を詠む催し事の中で詠まれた。残念ながら、いつどこで行われた「百首歌」だったのかは不明であるが、「忍恋(しのぶこひ・しのぶるこひ)」という題で詠まれた虚構の産物であることは確かだ。恋心を打ち明けられずに堪え忍んでいるという、架空の状況の中の出来事として味わうことが求められる。実は、この作品の中の作者は、女性ですらない。後藤祥子氏が明らかにしたように、こ

の歌は、男の立場で詠まれたものと考えるのが自然である。先ほども述べたように、一首は「忍恋」の題での詠なのだが、「忍恋」とは恋の早い段階を指し示し、それゆえ求愛する状況なのであって、求愛といえは男性の立場で詠むのが正しい詠み方だからである。式子内親王は、恋してはならぬ女性に恋をしてしまった男、という役どころを演じて詠んだのであった。

ところが、一首はしばしば式子内親王の実人生と重ね合わせて読まれてきた。後白河院の皇女として生まれ、神に仕える賀茂の齋院を務め、生涯独身を通じた彼女に、どうしてこんな情熱的な歌が歌えたのだろう、もしかしたらそういう秘めた恋をしていたのでないか、という具合にである。藤原定家・式子内親王それぞれの恋の妄執を語る能『定家』なども、その一つとってよいだろう。『定家』では、この歌が重要な役割を負っているのである。一人の恋愛など、事実かどうかはまったく不明で、仮に事実であったとしても、この歌の解釈に反映させるのが不適当なことは、「作品の中の作者」が男であること一つをとって、明らかである。しかしそういう読み方を誘い出すのも、やはり和歌の働きである。歌の醍醐味(1)の一種、といえはよかろうか。つまり、「作品の中の作者」は「現実の作者」とまったく別物とは言い切れないのである。二人の作者の間には微妙な引力が働いていて、チャンスがあれば重なり合おうとする。それはそうだろう。歌は「心」を表すことは間違いないのだし、その心にはやはり真情を汲みたくなるのが人情というものである。くつついたり離れたりするその融通無碍(2)な関係を抑えるためには、二人の作者の間を媒介するような、第三の作者が登場してもらおうほかない。それが「歌を作る作者」である。

「歌を作る作者」といったからといって、何も特別なものを想像する必要はない。言葉に向き合い、取捨選択し、組み合わせ完成させてゆく人のことである。それは「現実の作者」のことではないか、と疑問に思われるだろうか。たしかに、言葉を操る主体ということでは、一面は現実中存在する作者である。しかし歌を、まさに今作りつつある最中のことを考えてみよう。作っている彼（彼女）は、もはや日常生活を行っている、日常的な人間ではないだろう。現実とは別の宇宙を持っている和歌の世界に近づこうとし、そのあげくに引き寄せられて、普段とは別の人格に変化している。和歌的世界の理想に導かれて、儀礼的空間の中で演技するよう求められるからである。つまり、もう半面は和歌として表現されるべき自分、「作品の中の作者」としての性格を持つのである。「歌を作る作者」は、「現実の作者」が「作品の中の作者」に転じてゆく、まさにそのターニング・ポ

イントに位置している。

例えば、式子内親王の「玉の緒よ」の歌では、「絶え」「ながらへ」「弱り」はすべて「玉の緒」の縁語になっている。かなり縁語を多用している歌なのである。情熱的な内容ばかりに目をくらまされっていると、こういうレトリックへの評価がしにくくなってしまふ。現行の注釈書でも、少々手に余るところがあるようで、この四語が縁語にもなっている、という付随的な扱いをされることが多い。だが、それでよいのだろうか。これらの縁語は、⁽³⁾けっしてたまたま用いられているわけではない。では、縁語を駆使していることと、「情熱的な内容」とは、どう関わるのだろうか。

むしろこの場合は、縁語という手掛かりがあつたからこそ、普通では突き詰められない感情まで露わにすることができたと思ふべきなのだろう。「絶え」の繰り返しはもとより、「忍ぶる」以外は全部未来の状態動作であつたりするなど、この歌の言葉はたしかに尋常ではない。本来ならあざとすぎる感情の吐露だと非難されてもおかしくない。縁語のおかげで、ようやくそれらは必然性を確保している。縁語は、文字通り真珠を貫く糸（「玉の緒」）のようなもので、はじけ散つてしまふような言葉たちを、ようやくつなぎとめている。

例えば、自分をまるごと相手にゆだねるような、激情あふれるラブレターをいきなりもつたとする。嬉しいと思ふより、困惑することの方が多くに違いない。突然そこまで言われても、逆に拒否感を抱くこともある。自分の気持ちばかりが先走つて、肝腎の相手のことを顧慮していなかつたりするからである。「玉の緒よ」の歌は違ふ。これらの縁語は、「作品の中の作者」の、ほとぼしるような感情の一つ一つに必然性を与えている。ほら、やっぱりそうやっていく運命なのです、とでも言わんばかりに、「玉の緒」の糸が手繰り寄せられながら、訴える言葉がそこからめ取られてゆく。すると簡単には拒否できなくなる。受け止める方もいつの間にか巻き込まれてゆく、という仕掛けになっているのである。だから「歌を作る作者」も、安らかに想像の世界に遊ぶことができる。そして、これまでにない「作品の中の作者」に変貌していく。縁語は、「歌を作る作者」が、自らを共感可能な「作品の中の作者」へと変えるための仕掛けなのである。作者を社会化するための装置といつてもよい。

（渡部泰明『和歌とは何か』による）

〔問一〕 傍線(1)「歌の醍醐味の一種」とあるが、その説明としてもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 架空の恋心を歌っても、逆に恋の相手にはその本心を汲み取らせる効果。
- B 恋の妄執を演技することで、能『定家』のリアリティを保証する効果。
- C 現実をいったん保留することにより、本心を最大限にまで増幅させる効果。
- D 歌の内容が事実であるか否かを、読者の判断に全面的にゆだねてしまう効果。
- E たとえ真情に反する内容でも、歌の鑑賞者にそれを真実と思わせてしまう効果。

〔問二〕 傍線(2)「歌を作る作者」とあるが、その説明としてもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日常に身を置きながら虚構の世界にも生きる境界的存在。
- B 日常を反映する和歌世界の中で演技を行う重複的存在。
- C 日常と作品の中の世界を自由に往復する媒介的存在。
- D 日常を生きつつも歌の時空間を操作し得る超越的存在。
- E 日常を遮断し虚構の作者へと変貌していく過渡的存在。

〔問三〕 傍線(3)「これらの縁語は、けっしてたまたま用いられているわけではない」とあるが、式子内親王の歌において、縁語

はどのような機能を果しているのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 感情のほとばしりを円滑に表出することを可能にし、現実の作者の思いに対して共感を呼び起こさせる機能。
- B 恋に関連する言葉を連ねることにより、詠み手の壮絶な思いを増幅させ、読者に感情のたかふりを伝える機能。
- C 通常ではあり得ないと思われる程の激情的な恋の表出に必然性を与え、共感可能な情緒にまで転換する機能。
- D 読者の恋の感覚に訴えることで、和歌を解体させかねないあざとすぎる恋情を一般化していく機能。
- E 恋の思いに高ぶっている作者を、歌の内側の存在へと変貌させることで、社会的に広く浸透させる機能。

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 百首歌の場において「忍恋」という題が提示されれば、たとえ「現実の作者」が恋愛に充足していても、耐え忍ぶ恋を歌わなければ作法に反する。

イ 作品という舞台にいる作者と、それを詠んでいる作者がどのような関係にあるのかを分析していくことが和歌を鑑賞する上で重要である。

ウ 藤原定家と式子内親王の恋の妄執を描いた能『定家』において、式子内親王の和歌は「作品の中の作者」を重視して解釈される場合、大きな意味を持つ。

エ レトリックは、真実の心を歌う際にはその自然な流れを阻害してしまうが、式子内親王の時代には、別の人格を演技する手段として尊ばれていた。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

春と秋とは昔より人びと心とどめて、おのがひきびきあらそひ言ふれど、春のあけほの、秋の夕べ、花鳥のいろね、紅葉のにしき、いづれかまさりおとるべきならねど、えんになまめかしう、すずろに心のあくがると、見る物ごとにうらがなしう、⁽¹⁾あやなく涙ぐまるるが、人の本情のけけしきとくすしきとにおのづからあひあふなめりとなん思つたまへらるるは、いかがはべらん。⁽⁴⁾世づかはしうすいたまふめる御心には、かならず春をやひかせたまはんとすらん。まろなどはくしいたう、秋のかたにこそはべれ。

さるは、かうやうに春秋をこそ定めあらそへれど、夏と冬とは、いづれにかはべらん。卯の花、山のほととぎすより始めて、螢飛びかふ池の蓮、⁽⁵⁾ゆふ深の川原撫子など、言ひたつれば、なほ多かめれど、げにこそ夏は夜、月のあかきにしくものなんはべらざりけらし。冬は木枯らしのうとましきと、月影のすさまじきならでは、よろづに見聞くものはべらず。霜氷のさだめて冷たき中に、ひとり雪なんなすらひなう今めかしくて、世にもてはやさるることも、春秋の月花にをさをさけおされざれば、おほかたは夏に負けても、このひとつをもて、なほ冬を勝ちとや聞こえさすべき。⁽⁶⁾はた、なほ申さば、蚊遣り火のいふせう、照る日のはたたくもあいなかるべし。冬ごもりの窓に雪を集めて、火桶炭櫃にうもれたらん、いかがは心のどのどしかれ。⁽⁷⁾かう思つたまへ定むるを、例の御すき心には、いかに見たまふらん。⁽⁸⁾願はくは判者になりて、御返りごとたまへや。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

〔「雅言用文章」による〕

注 くしいたう……ひどく気がふさぎ

〔問一〕傍線(1)「あやなく」・(2)「くすしき」・(7)「あいなかるべし」の意味としてもっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「あやなく」

- | | |
|---|-------|
| A | 無闇に |
| B | 不恰好に |
| C | わけもなく |
| D | とめどなく |

(2) 「くすしき」

- | | |
|---|-----------|
| A | 陽気であること |
| B | まじめであること |
| C | 感傷的であること |
| D | 不可思議であること |

(7) 「あいなかるべし」

- | | |
|---|---------------|
| A | いやな感じでしょう |
| B | ふさわしくないでしょう |
| C | すばらしい眺めでしょう |
| D | 匹敵するものもないでしょう |

〔問二〕 傍線(3)「いかがはべらん」の意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A どのように思いますか
- B どうしようもありません
- C どうにもとめられません
- D どっちがふさわしいでしょう
- E どうしたらよろしいでしょう

〔問三〕 傍線(4)「世づかはしうすいたまふめる御心には、かならず春をやひかせたまはんとすらん」についての説明としてもつ

とも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A からかい気味に相手の着さをあげつらい好みを決めつけて挑発している。
- B 伝統的な美意識を無視した世の中の浮薄な風潮をさりげなく皮肉っている。
- C 古来からの季節感から抜け出せないでいる者の保守的態度を批判している。
- D 世間一般の好みの傾向について公平な態度で分析している様子がうかがえる。
- E 毅然きぜんとした態度で自分の好みを貫く人に対する賞賛の気持ちが表現されている。

〔問四〕 傍線(5)「げにこそ」とは、ある古典作品の一節を意識しての言葉である。その作品の名称を左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 古今和歌集
- B 源氏物語
- C 枕草子
- D 方丈記
- E 徒然草

〔問五〕 傍線(6)「なほ冬を勝ちとや聞こえさすべき」の現代語訳としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A いっそう冬のほうを勝ちとする声が高まっているではありませんか
- B それでも冬のほうを勝ちだと申し上げるのがよろしいのでしょうか
- C これ以上冬のほうが勝ちであるなどと仰せになってはいけません
- D もっとも冬のほうが勝ちであるなどとおっしゃるわけがありません
- E やはり冬のほうを勝ちと申し上げるのがよいのではないのでしょうか

〔問六〕 傍線(8)(9)(10)の文法的説明としてもつとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 動詞の連用形
- B 動詞の命令形
- C 尊敬の意の補助動詞の終止形
- D 尊敬の意の補助動詞の命令形
- E 謙讓の意の補助動詞の連用形
- F 謙讓の意の補助動詞の連体形